

吹田 孤蓬（すいた・こほう）

1、プロフィール

青森俳句会の代表として俳誌「暖鳥」を発行、風土に根ざした俳句をめざす。青森県俳句懇話会の設立に尽力、県俳壇の隆盛に貢献した。暖かみのある句風が人々を魅了する。

<生没>

1907(明治 40)年6月 22 日 ～ 1989(平成元)年5月 31 日

<代表作>

句集『壺中壺』『壺中壺以後』『彼岸の河童』

<青森との関わり>

青森市に生まれる。大学卒業後、青森市立第一高等学校等に勤務し、郷里の子弟の教育に携わった。

2、作家解説

本名清三郎。大正 14 年に青森商業学校を卒業後一時黒石尋常高等小学校に勤務、昭和5年に旧制弘前高校文科乙類に入学、卒業後京都大学法学部に入学、在学中に飯田蛇笏の長男総一郎に勧められ作句を始める。在学中の昭和 12 年に吹田登美子と結婚、夫婦で臼田亜浪主宰「石楠」に投句した。大学卒業後青森市に帰り、妻の実家の商店に勤務するかたわら作句活動を続け、昭和 15 年 3月に市内の各俳句結社統合の機運があり「青森俳句会」が結成された際、推されて機関誌「海流」の発行責任者となった。

戦後「青森俳句会」の復興に努力し、昭和 21 年に機関誌「暖鳥」を創刊した。そしてその巻頭言には「永い抑圧の間にも脈々として、その生命を続けて来たのであるが、今甦生の曙光を浴びて青森県俳壇に躍りでたのである」と記し、今まで抑圧されてきたものを一気に爆発させることになった。以後県内の有力俳人を同人として迎え、北方風土に根ざした俳誌作りに勤め、平成元年逝去するまで通算 499 号

を発行した。その間、同誌からは県俳壇はもちろん、中央俳壇においても活躍する者が多数輩出した。

なお、「青森俳句会」は昭和55年度に第6回青森県芸術文化報奨を受賞している。また、若き日の寺山修司が投句していることも特記してよい。

孤蓬の戦後はまさに「暖鳥」とともにあったといってもよいが、昭和22年からは青森市立第一中学校、23年からは青森市第一高等学校に勤務、昭和43年に退職するまで教職にあり、独特の風貌とユニークな教育で人気を博した。

昭和34年には、青森県俳句懇話会の設立に尽力、47年にはそれまでの作句活動の集大成ともいべき句集『壺中壺』を発行した。そして永年の俳句活動に対して、48年には第15回青森県文化賞、51年青森県褒賞、63年には地域文化功労者賞が与えられている。昭和61年第二句集『壺中壺以後』、逝去後の平成2年、句集『彼岸の河童』が刊行されている。また青森市内に句碑1基が建立された。

3、資料紹介

○『壺中壺』

図書

1972(昭和47)年10月1日

180mm×130mm

第1句集。暖鳥叢書第一集として青森俳句会より発行。「暖鳥」に掲載した句より取捨選択し、戦後の俳句523句及び学生時代の2句の計525句を収めている。天衣無縫な孤蓬の人柄を偲ばせる句が多く収められ、人間的暖かみを感じさせる句集である。